第42回児童生徒 読書感想文コンクール

児童生徒読書感想文コンクールに、多くの優秀な作品が寄せられました。
先月に引き続き、最優秀作品を紹介します。

■小学校5年生の部　最優秀賞

アラスカとオーロラ

美留和小学校　橋田　明 君

ぼくは、本物のオーロラを見たことがありません。なので、一度でもいいから、オーロラを見てみたいです。ぼくが読んだ本は、星野さんが、実際に体験したことが書かれています。

星野さんは、アラスカ鉄道でオーロラの撮影に出かけました。アラスカ鉄道とは、アンカレジとフェアバンクスをむすぶ鉄道です。ぼくもこの鉄道に乗ってみたいです。星野さんは、タルキートナという場所でおりました。少しすると、ライトをつけたトラックがやってきました。パイロットの、アーニーです。

次の日、アーニーのヘリコプターでマッキンレー山に向かって飛びました。今日から、一カ月間のオーロラ撮影が始まるのです。山おくで一人でキャンプするなんて、とても勇気がある人だなと思いました。今日は二月十五日なので、一カ月後の三月十五日にアーニーのヘリコプターが来ます。一カ月の間、星野さんは、凍傷になったりかぜをひいてしまったりしました。ぼくは、凍傷になったことがありませんが、とてもいたそうです。結局オーロラがきれいにみれたのは、三月二日の一日だけでした。もっとたくさんみれるのかなと思っていたら、一カ月に一日しかみえなかったなんて残念だったと思います。

「この広大なアラスカの中で、月とオーロラをながめている生物は、ぼくしかいない」と、星野さんは書いていました。そのとおりだと思います。くまやりすも、冬ごもりしているからです。

三月十五日、アーニーのヘリコプターがやってきました。星野さんにとって、満足した一カ月間だったと思います。自然を撮影するのは、とても大変なんだと感じました。

この本は、お母さんが、ヒグマの調査でアラスカに行ったとき、リュックの中に入れていった本です。オーロラは冬に出ます。お母さんが行ったのは秋で、オーロラは見れなかったけれど、紅葉がきれいだったと、言っていました。ぼくは、冬のアラスカに行ってみたいです。

これは、「アラスカ光と風」の中の、一章だけです。ほかにも、エスキモーの村でクジラをつかまえるために何カ月もかけてつかまえる話や、カリブーの写真をとるために、ブルックス山脈の中で生活する話もありました。何万頭のカリブーのむれが写っている写真がありました。すごく多い数だなと思い、本物をみたくなります。

星野さんは、クマにおそわれて死んでしまいます。自然のかんきょうは、かこくなんだなと改めて思います。

ぼくは、写真をとるのもすきです。弟子屈町フォトコンテストに毎年応募しています。しょう来カメラマンになるのもいいな、と思いました。

書名『アラスカ光と風』
星野　道夫　著

（寸評）
厳冬期のアラスカの厳しい自然環境の中で、美しく輝くオーロラ。この本に描かれている大自然の素晴らしさとそれを求めて旅をする星野さんの生き方に、橋田くんがひきつけられた気持ちが伝わってきました。危険や苦難が待ち受けた旅を乗り越えた先にあるからこそ、その輝きはかけがえのないものなのでしょう。いつかアラスカの地に立ち、オーロラの写真を撮っている橋田くん。すてきな未来が目に浮かんできます。

そのほかの最優秀作品についても、来月以降順次紹介していきます。
※児童の学年は、コンクールが行われた平成28年度当時のものです。

■小学校6年生の部　最優秀賞

ナオ君が遺してくれたものとは

弟子屈小学校　沢原　美義 さん

平成二十七年十一月十日、十五時五十五分、私の祖父が六十九才で胃癌により、この世を去りました。祖父は癌宣告を受けてから一日、一日を大切に過ごし、自分のことよりも私達家族の事を心配してくれました。

私は、毎日なんとなく生活しています。できることなら勉強もしたくないし、学校へ行かず家でゴロゴロしていたいのが本音です。

この本を読んで私は健康な体で学校へ通い家族と一緒に生活できることが、一番幸せな事だと思いました。

しかし、この本に出てくる直也君にとっては、当たり前の事ではありませんでした。

直也君の病気は、ユーニング肉腫という癌で抗癌剤治療をしたり、手術をしたりとつらい治療をしていかなければなりません。そのためには、長い入院が必要です。ですので、家族と一緒に、寝ることもできないのです。

私は毎日、父と母と妹と同じ部屋で、同じ布団で寝ています。妹と一緒にねるとさみしくないし、安心して寝ることができます。直也君は、入院中、一人で寝なければなりません。五才の子が一人で入院して一人で寝るということはすごくさみしいことでしょう。直也君には三歳違いの弟がいます。直也君のお母さんは、その子の面倒も見なければなりません。直也君の弟もお母さんに甘えたりしたいと思います。直也君の入院生活が長くなると、弟のことを気にかけ、弟を思いやる言葉が出てきました。

「明日は、病院に来なくていいよ。たまには、亮也と一緒にいてあげてよ。」と、弟を思いやる直也君は、心の優しい男の子だと思いました。

一時は良くなった直也君。しかし、直也君のお母さんは直也君に癌が再発したことを伝えました。直也君は癌が再発しても「生きて生きていきまくるぞ！！」「ナオは死なないからね。」と、前向きな気持ちで前に進む姿勢の言葉から、直也君は心が強く勇ましい男の子だと私は思いました。

私の祖父は、「死にたくない、孫の事が心配だ。」と言っていたと母から聞きました。祖父の場合は、余命一年と言われて手術もできなく、抗癌剤治療しかできない状態でした。癌とうまくつきあって生活していくしかなかったのです。

私がもし癌だったら癌という病気と向き合うことができず、泣いてばかりいて家族のことを気にかけたりすることができないと思います。絶望感でいっぱいになると思います。

生きることは、必ず死がやって来る。それは、絶対にさけられない。直也君は、癌という病気を通して「生」と「死」について考えていたんだと思います。

直也君の癌は次第に悪化していきました。直也君はそんな状態でもお母さんの事を心配して「ナオはね、死ねないんだよ。お母さんの心の準備ができていないから。」と言いました。私はその言葉に胸を打たれました。

ナオ君は、「あと半日です。」と、宣告されながら二週間もがんばりぬきました。それは、家族の心の準備ができる時間を直也君があたえてくれたのだと思います。最後まで家族のことを考えて亡くなっていったのです。

この本を読んだ私は、直也君に教えられたことがいくつかあります。健康な体で家族と過ごせる事は、幸せな事。一日一日を大切に生きる事。学校で勉強ができるという当たり前の事が幸せという事。

直也君が家族に遺していったものがあります。私は、『勇気』『希望』『愛情』だと思っています。最後に私から直也君とおじいちゃんにメッセージがあります。

「直也君、最後までよくがんばったね。」
「おじいちゃん天国で私の事を見守ってね。私、勉強頑張るからね。」

書名『がんばれば、幸せになれるよ』
山崎　敏子　著

（寸評）
この本を読みながら、祖父の思いを振り返り、健康な体や大切に生きることを教えられたと書いてあるところがよかったです。
自分と主人公、その家族、病の三つの対比を元にして文章が組み立てられており、読者のことを考えて工夫して書いている点が素晴らしいと思います。
本に書いてある事実とそれを読んでの感想を区別して記述していた。また、大切だと思う部分が詳しく書かれているなど、メリハリをつけて文章を構成している点がよかった。